

# エイジズムと社会福祉実践

## — 専門職の高齢者観と実践への影響 —

鳥 羽 美 香\*

Key Words : aged society, ageism, stereotype, social work practice, social worker

### はじめに

高齢化率が総人口の2割に達し、まさに高齢社会の中で私達は生活している。社会には多くの高齢者が生活しており、その実態は多様化がすすんでいる一方で、高齢者や加齢に対する適切な知識や実態の把握がなされているとは言い難い。現在は介護保険制度が導入されたこともあり、高齢化の問題は、寝たきり老人や認知症など、介護に関することに特化されている印象がある。しかし、高齢者になればすべての人が寝たきりや認知症になる訳ではない。縁側で日向ぼっこをする腰の曲がったご隠居、といったドラマなどで見かけるイメージも現在では現実とそぐわないことも多い。高齢者に対する偏見やステレオタイプな見方をエイジズムと呼ぶが、わが国ではエイジズムが数多く存在するといえる。

高齢者福祉の現場においても多様化・個別化する高齢者の生活全体を視野にいれ、その質を向上させる取り組みが益々必要となってきた。しかし、高齢者に対する偏見・エイジズムに関する認識が充分とはいえないのが現状である。本稿では、主にわが国における高齢者観の変遷を振り返るとともに、エイジズムの現状と課題についての考察をし、それらが社会福祉の専門職や援助実践に及ぼしている影響と課題について検討したい。

---

Ageism and Social Work Practice — The Influence of Ageism on Social Workers —

\*Mika Toba

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,  
1196 Kamekubo, Fujimino-Shi, Saitama 356-8533, Japan

Accepted November 15, 2005.      Published December 20, 2005.

## 1. 高齢者観の変遷

わが国における高齢者観について、家族意識や老親扶養に関する変化なども踏まえ、以下に見ていくこととする。

### （1）戦前における家制度と高齢者観

戦前においては、親孝行思想など儒教的な啓蒙により、老親扶養意識や敬老思想が一般的であった。儒教の養老・敬老、老人を大切にする思想は、その思想体系の核心となる「孝」の思想に密接に結びついているといわれる。<sup>(1)</sup> 孝とは「子の親への従順」つまり尊親を表す。孝の実行、尊親思想のさらなる浸透を促すために、年長者を尊び高齢者を大切にする、敬老思想が提唱されることになった。<sup>(2)</sup> 敬老は尊親につながり、尊親は敬老につながるとして、儒教では敬老の思想は事実上孝の思想とほぼ同等視されているという。<sup>(3)</sup>

また、家制度との関係でいえば、戦前の家制度は孝の思想や敬老思想に支えられ、老親扶養を支えるシステムとしての機能を果たしていたといえる。日本の旧民法においては、「家」を原理とする家父長制があり、代々の家の存続に価値が置かれていた。主として長男は家名、家産、家業などを継承し、それと同時に親を同居扶養する義務を負った。子どもは親に生んで育ててもらった恩を受け、それを孝で償うという価値観があった。また、家長、跡取り、嫁、孫などそれぞれの立場は、家を構成する地位を表しており、老親の介護などは嫁の務めという家族規範があった。これらの家というシステムの中で、高齢者の生活、地位は比較的安定していたといえる。また、隠居として老年期までに蓄積されたその知識や経験により、人々からの尊敬を集めることが出来たという。<sup>(4)</sup>

### （2）戦後における高齢者観の「タテマエ」と「ホンネ」

戦後、新しい民法のもとでは、家督相続制を中心とする家制度は廃止された。家中心の家族から、夫婦中心の家族へと変貌をとげた。新しい憲法、民法を土台にした新しい家族意識の形成が浸透するにつれ、家意識も次第に希薄化してきたといえる。結婚が、個人と個人の結びつきにより成立し、そして家族が形成されるという夫婦を中心としたものへ変わったことで、人々は家を中心とした家族規範から個人の考え方を尊重したものへと変化してきた。そして老親扶養に関する考え方も、また孝や敬老に関する考え方も変化した。社会的にも1950年代後半から1960年代を通して高度経済成長の時代に人口が都市集中化し、親世代との別居、核家族化が進んだ。

戦後、漸次社会福祉各法が整備されてきたが、高齢者に関しては、1963年に老人福祉法が施行された。この老人福祉法の基本理念の中では、「老人は多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として敬愛され、かつ健全で安らかな生活を保障されるものとする」とされ、そこには

敬老と生活の保障を盛り込んだ倫理的な要素が根強く残っている。

1960年代当時は高齢化率も5%台から6%台を推移していた時期であり、まだ「寝たきり」などの高齢者介護問題がそれほど深刻化していなかった時代といえる。1970年代に入ると、特別養護老人ホームも増え、また、入院治療だけでなく、介護が必要な高齢者の入院が増えていった。高齢者等を指して社会的弱者という言葉が使われるようになったのは、70年代に入ってからだといわれているが、寝たきり等<sup>(5)</sup>の高齢者が増え、介護問題が浮上してきて、高齢者に対する意識はさらに変化をしてきたといえる。

副田（1986）によれば、1963年に施行された老人福祉法の基本理念が、高齢者をまず過去に能力を発揮したものと捉えるのに対して、社会的弱者の発想は老年を現在において能力が不足・欠落するもの、無能力なものとして捉えることである。老年にかんして、「タテマエ」は過去の能力、実績を強調し、「ホンネ」は現在の無能力・弱さをあなどるといってもよい<sup>(6)</sup>。奥山（1999）によれば、タテマエとしての敬老思想が広がっているにもかかわらず、一般の人々の間にホンネとしての軽蔑意識や無関心が浸透する原因として、めまぐるしい技術革新や若者文化中心の価値体系、消費生活・個人生活重視の傾向、死へ結びつく高齢者の病気や死に対する嫌悪感などをあげている<sup>(7)</sup>。

そしてタテマエでは敬老思想が存在しているものの、実態としてはそれが希薄化している現代において、敬老思想の意識と精神を自ら実践してきた高齢者とこれらの意識が薄らいでいる若い世代との間でさまざまな軋轢が生じているといえる。

### （3）現代の若者の高齢者観

わが国では、戦後大衆文化の進行にともない、副次文化としての青年文化が影響力を増し、その価値観において、若さは無条件に肯定されたといえる。そして若さの対極である老いに対する否定的な捉え方が強まってきたといえる。そんな現代において、青少年はどのような高齢者観をもっているのだろうか。

今まで行われてきた若者による高齢者観の調査結果は、総じて否定的なものが多いという。佐藤・長嶋（1976）によると、高齢者のイメージを大学生に調査したところ、「さびしい」、「弱い」、「暗い」などの否定的イメージが報告された<sup>(8)</sup>。

深谷（1995）による小学校高学年生を対象にした調査によれば、孫として祖父母をみた場合、もっとも好かれるのは「母方の別居している祖母」であり、もっとも好かれる割合の低いのは「父方の同居している祖父」であった。祖父母と別居している子どもの方が、うるさいことをいわずにかわいがってくれる存在として祖父母に好感をもっている。一方、同居している子どもは身近で口うるさくあれこれいう祖父母として好感度は下がるが、日常生活面で具体的な高齢者の生活を見ているので、より深く理解しているという。また、祖父母と同居している家庭に育つと、別居している家庭に比べ、親が年をとったら「親と同居して面倒をみる」と思っている割合が多いという<sup>(9)</sup>。さらに、同様に小学生を対象にした中野（1995）の調査によれば、小

学生の高齢者観・お年よりイメージは、全体的にみて肯定的である。そしてその認識・イメージに影響を与える要因としては「お年よりとの過去の経験」であるという<sup>(10)</sup>。

島村（2002）は大学1年生から4年生181名を対象とした「お年よりに関するイメージのアンケート」調査を行った。仮説としては「祖父母との交流がある若者のお年よりイメージは好意的なもので、交流がない若者のお年よりイメージは否定的である」というものである。「あなたは老後とはいつからはじまると思いますか」という問いに対して、「定年退職後」と答えた者が54.7パーセントであった。祖父母との交流については、大多数の学生が同居別居を問わず祖父母との交流を持っていた。「あなたはお年よりは好きですか」という問いに対し、全体の約8割がお年よりに好意的であった。また、敬老精神については、今の日本の社会では敬老精神があると思っている学生は全体の33.9パーセントであった。さらに、棄老の仕組みについては、今の日本社会ではお年よりを排除しているような仕組みがあると答えた学生は全体の37.1パーセントであった。お年よりのイメージに対し自由回答を求めたところ、肯定的な意見としては、「知識が豊富、知恵袋、物知り、経験豊か、人生の先輩、やさしい、かわいい」などがあり、否定的な意見として「体力の衰え、頑固、遅い、口うるさい、不自由、さびしい」などがあつた。どちらかというとな否定的な意見が多かつたという。島村によれば、必ずしも祖父母との関わりがあるからといって、お年よりイメージは好意的とはいえず、また反対に祖父母との交流がないと答えた学生のお年よりイメージはやや否定的な意見が多かつたという<sup>(11)</sup>。

また、高齢者に対する否定的な意見が多かつた社会的背景として、核家族化による高齢者との交流の減少、扶養意識の変化、年齢による雇用制限といった社会的背景があげられている<sup>(12)</sup>。

戦後核家族化が進んだが、現代の日本においては、その就業形態が、住む場所も収入も職場によって決められ、たとえ同居をしたくても不可能な状況が生じている。さらに、同居意識の変化、扶養意識の変化などについていえば、扶養という視点から見ると、同居が最も効率的であるが、世代間の価値観の相違やプライバシーの問題など、それぞれの独立した生活の尊重という意識が近年強まってきている。2世帯住宅が好まれ、玄関や浴室、トイレまで全て別々という形態が好まれるのも、こういった時代の流れであろう。そうした現代において、高齢者と若者との間に交流が減っているといえる。

2003年に行われた18歳～25歳の男女121人対象の調査によれば、多様な高齢者イメージの中で、「いろいろなことをおしえてくれる」80.1%、「やさしい」74.3%、「尊敬できる」53.7%、「何でも知っている」53.7%などとともに、「がんこ」70.2%、「病気がち」68.5%、「気むずかしい」55.3%など、肯定的イメージも多かつたが同様に否定的イメージもみられた。こうした両極のイメージについて、保坂ら（1986）は、イメージ・老人観を規定する要因として、もっとも大きいのが「老人と話す機会」であり、次に「老人や老人問題に対する関心」をあげている<sup>(13)</sup>。島村の調査においては、高齢者との交流があるからといって高齢者の肯定的イメージが強まるとは証明されなかつたが、保坂らによれば、同居経験のみでは重要な規定要因とはなり<sup>(14)</sup>えず、その交流の経験の内容が問題になるという<sup>(15)</sup>。確かに、祖父母など身近な高齢者との良好

な関係を早くから結ぶことができれば、高齢者に対する肯定的イメージは醸成されやすいことは推測できよう。

## 2. エイジズムとは何か

高齢者に対する否定的な視点は、高齢者差別（エイジズム）を生み出す温床になると思われる。エイジズムに関して、わが国においては、例えば、「児童虐待」や「ドメスティックバイオレンス」などと比べ、メディアにおいて取り上げられる機会も少ない現状である。しかし、前述の2003年の18歳～25歳の若者を対象とした調査においても、身近なところで、高齢者に対する侮蔑的な言葉が聞かれていることが述べられている。例えば、「クソジジイ」、「クソババア」、「邪魔」、「ボケ老人」などである。<sup>(16)</sup>これらの言葉には、激しい攻撃性や憎しみなどが含まれていると思われる。こういった言葉がエイジズムを生み出しているし、またエイジズムの結果、こうした言葉が日常よく使われるようになってきていると思われる。

現代はタテマエでは敬老思想が存在しているものの、実態としてはそれが希薄化している点について前述した。副田（1978）によれば、それらが、高齢者にたいする蔑視意識、高齢者にたいする無関心、などの評価を生み出しているという。<sup>(17)</sup>

そうした現代において、高齢者と若い世代との間での意識の相違が大きく、それが高齢者差別（エイジズム）へとつながっていく温床になっていることはたしかであろう。

わが国においては、未だ一般的になっていない用語ではあるが、高齢者に対する差別をエイジズム（ageism）と呼ぶ。広義にはすべての年齢層が対象とされるが、狭義には高齢者がただ年をとっているというだけの理由で、世間の人々から偏見を持たれたり、様々な差別を受けたりすることを指す。この概念は1968年、米国の国立老化研究所の初代所長であった老年学者、バトラー（Butler, R.N.）によって初めて提唱された。バトラーは、その著書“Why Survive? Being Old in America”（老後はなぜ悲劇なのか？）の中で、1968年に自らこのエイジズムという新語を作り出したことに触れ、「人種差別や性差別が、皮膚の色や性別をもってその目的を達成するように、老人差別は、年をとっているという理由で老人たちを組織的に一つの型にはめ差別をすること」と定義した。<sup>(18)</sup>彼は同書で「多くのアメリカ人にとって、老後は悲劇である。無言の絶望と困窮と孤独、そして口には出さないが激しい怒りを感じながら生きる時期である。」また、「私たちは老後の生活が極端に苛酷な社会をつくってしまった。老後の悲劇とは、我々の誰もが老いそして死ぬという事実ではなく、老いへの道のりが、無自覚、無知、貧困のために、不必要なまでの絶えがたい苦痛、侮辱、無気力、孤独なものになってしまったという事実である。」と書いている。<sup>(19)</sup>

米国において、19世紀にレイシズム（racism）が、20世紀に入ってからにはセクシズム（sexism）がそれぞれ問題化され、エイジズムは、それら2つの差別に次ぐ第3の「イズム」であ

るといわれる。

老年学者のバルモア（Palmore, E.B.）は、「アメリカは他のどんな社会も及ばないほど高齢者に対する様々な偏見と差別を生み出してきた。偏見は、高齢者のほとんどはもうろくしているといった類の固定観念から高齢者には性的満足など必要ないとする残酷な思い込みまで様々である。差別は定年退職制から果ては高齢者虐待にまで及んで<sup>(20)</sup>いる」と述べている。さらにエイジズムの諸形態を分類している。彼によれば、高齢者に対する偏見として、以下の種類があるという。否定的固定観念と否定的態度、肯定的固定観念と肯定的態度の4つである。そしてこれらの偏見が、個人的、もしくは制度的差別につながっているという<sup>(21)</sup>。

否定的固定観念には、病気、性的不能、醜さ、精神的衰え、精神病、役立たず、孤立、貧困、鬱の9つをあげている。また、肯定的固定観念とは、高齢者は親切である、知恵がある、頼りになる、裕福である、政治力がある、自由である、永遠の若さを保っている、幸せである、の8つをあげている<sup>(22)</sup>。バルモアは、否定的エイジズム及び肯定的エイジズムに関して、若い労働者が高齢の労働者に対する雇用差別から利益を得ている例や、逆に高齢労働者を優遇する雇用差別が高齢労働者に利益となる例やまた、社会保障制度やその他の所得移転プログラムを通じて支出される資金が高齢者に利益をもたらしている例をあげ、それぞれのエイジズムにより、利益を得る者が存在するからこそ、エイジズムはなくなると指摘する<sup>(23)</sup>。また、加齢の事実についての知識が豊富な人は否定的な固定観念が少ない傾向があるという見解を述べた<sup>(24)</sup>。

### 3. FAQ(加齢の事実についてのクイズ)にみる社会福祉学専攻学生と看護学生のエイジズム

前述のバルモアが、加齢に対する知識と態度を測る間接的な尺度として利用できるクイズを開発している。このクイズを使用した調査は、様々な国において実施されてきたが、わが国においても過去何回にもわたり、実施されている。クイズの質問項目については、次の通りである（表1）。

このFAQ（The Facts on Aging Quiz）であるが、バルモアによると、奇数項目はすべて誤り、偶数項目はすべて正しいという。また、これらのクイズを人々の態度をはかる指標として利用するには、回答者がある項目に正しく答えられなかった場合、その項目が高齢者に対する肯定的偏りを示しているのか、否定的偏りを示しているのかを知らなければならないとのことである<sup>(25)</sup>。ちなみに肯定的な偏見の質問は、2, 4, 6, 12, 14であり、否定的な偏見の質問は、1, 7, 11, 13, 17である。上記の2, 4, 6, 12, 14の質問について誤とした者は、肯定的な偏見をもっているとされ、上記の1, 7, 11, 13, 17の質問について正とした者は、否定的な偏見をもっているといわれる<sup>(26)</sup>。

前述したとおり、わが国における若者を対象とした調査では、高齢者に対し、否定的な意見

表1 加齢および高齢者に関するクイズ (The Facts on Aging Quiz, 1998 Palmore, E.B. 鈴木研一訳『エイジズム』明石書店, 2002, 317~319頁より作成)

1. 高齢者 (65歳以上) の大多数はばげている (記憶力が衰え, 周囲の人や出来事・時間などの正しい判断ができなくなり, 痴呆になっている)。	正・誤
2. 高齢になると五感 (視覚, 聴覚, 味覚, 触覚, 嗅覚) のすべてが衰えがちになる。	正・誤
3. 大多数の高齢者は性行為に関心がないか, 性的不能である。	正・誤
4. 高齢になるにつれ, 肺活量は低下する傾向がある。	正・誤
5. 高齢者の大多数はほとんどいつも惨めだと感じている。	正・誤
6. 体力は高齢になると衰えがちである。	正・誤
7. 高齢者の10人に1人以上が長期ケア施設 (ナーシングホーム, 精神病院, 老人ホームなど) で暮らしている。	正・誤
8. 高齢のドライバーが事故を起こす割合は65歳未満のドライバーより低い。	正・誤
9. 中中年労働者は一般に若い労働者より仕事の能率が劣る。	正・誤
10. 高齢者の4人に3人以上は人の手を借りなくても普通の活動をこなせるほど健康である。	正・誤
11. 高齢者の大多数は変化に適応できない。	正・誤
12. 高齢者は一般に新しいことを習うのに若い人より時間がかかる。	正・誤
13. 高齢者は若い人より鬱状態になりやすい。	正・誤
14. 高齢者は若い人より反応が遅い。	正・誤
15. 総じて, 高齢者は似たり寄ったりである。	正・誤
16. 高齢者の大多数は退屈など減多にしない。	正・誤
17. 高齢者の大多数は社会的に孤立している。	正・誤
18. 中中年労働者は若い労働者より事故に遭う率が低い。	正・誤
19. 今では人口の20%以上が65歳以上である。	正・誤
20. 医療従事者の大半は高齢者を後回しにする傾向がある。	正・誤
21. 大多数の高齢者の所得は貧困ライン (連邦政府の規定による) 以下である。	正・誤
22. 高齢者のほとんどは何らかの仕事をしているか, したいと思っている (家事やボランティア活動を含め)。	正・誤
23. 高齢者は年とともに信心深くなる。	正・誤
24. 大多数の高齢者は, 自分は苛立ったり, 怒ったりすることは減多にないと言う。	正・誤
25. 高齢者の健康状態と経済的地位は2010年には (若い人々と比べて) ほぼ同じか悪化しているだろう。	正・誤

も多く見られた。それでは, 社会福祉や看護などを学ぶ大学生はどのような意見をもっているのだろうか。

2003年に南が, 社会福祉学を専攻する大学生1年と3年生に対してFAQを使用して行った調査によれば, 1年生よりも3年生の方が, 高齢者に対して知識を多く持ち, 正しい認識をしていることがわかった。また, 肯定的偏見スコアも否定的偏見スコアも, 1年生より3年生の方が低くなっており, 社会福祉援助技術現場実習の経験がマイナスに働いてなかったことを示したという<sup>(27)</sup>。社会福祉の高齢者関連授業や実習などが, エイジズムを軽減する役割を担っていることを示す事例であると思われる。

一方, 小川 (2001) が看護学生を対象に同じくFAQを使用した調査では, 1年生よりも, 3

年生の方が、より高齢者の心理状況や社会生活の適応性や効率性について、否定的な偏見をもつ傾向を示し、誤答数も多かったという。この調査では、老年看護学の学習により、高学年の学生の方が高齢者の特徴を誇張して一般化し、理解し、否定的偏見が強くなったということである<sup>(28)</sup>。

高齢者と同居していない、関わる機会の少ない学生は、病院実習において心身に障害をもつ高齢者に会おうと、そのイメージが強く焼きついてしまう。そのため大多数の高齢者が地域において普通に日常生活を送るという事実を経験として認識することが困難であると推測できる<sup>(29)</sup>。

前述の社会福祉学専攻の学生に関して言えば、同居率も比較的高く、ボランティア経験により高齢者と接触した機会も多い学生であったという。そういったことから考えると、高齢者の多面的な側面（病気や障害になってからではなく、元気なときの高齢者を知っていること）を内面化することにより、偏見は軽減されるのであると思われる。

#### 4. 社会福祉実践におけるエイジズム

パルモアによるエイジズムについての研究結果とわが国における社会福祉学専攻の学生と看護学生のエイジズムについてみてきた。わが国において、エイジズムは社会福祉実践にどのような影響を及ぼしているのであろうか。

ソーシャルワーカーの倫理綱領をみると、たとえば、利用者に対する倫理責任の点では、「受容」として、「ソーシャルワーカーは、自らの先入観や偏見を排し、利用者があるがままに受容する」という項目がある。これは、利用者のいかなる属性についても先入観や偏見をもつことなく、利用者があるがままに受け止めるということの意味している。この利用者の受容に関してはソーシャルワーカーであれば常識として身に着けるべき倫理であり、援助態度であるといえる。しかし、実際の社会福祉の様々な援助場面において、利用者に対する「偏見」は、潜在化・顕在化して様々な形で存在しているように思われる。

エイジズムといったときに実践現場においては、どのような事柄が存在するのでであろうか。例えば、デイサービス事業のことを日本語で宅（託）老所と呼ぶことがある。これは、そもそもは託児所が高齢者分野に应用されて、託老所と呼ばれるようになったものである。最近では自宅の延長として宅老所と書く場合が多いようであるが、「託」の字を使用すると、まさに託児所を連想させる用語である。託児とは、幼児を預けるところ、託老とは高齢者を預けるところ、という繋がりがみいだせるであろう。

利用者の家族は家の中で、あるいは近隣や職場で、「デイサービスにおじいちゃん（もしくはおばあちゃん）を預ける」という言い方をする。また、職員も「利用者をお預かりする」という表現をすることもある。お年よりを一人の自立した人間と捉えるならば、「預ける（預かる）」という用語は使用しない。これは、一種のエイジズムであると考えられる。このように実践



場面の様々な場所でエイジズムが存在する。筆者がデイサービスセンターに勤務していた1990年頃であるが、利用者のことを「真一さん」「恵子ちゃん」などと苗字ではなく名前で呼ぶ職員が複数いた。理由を問いただすと、「だってかわいいから。つい親しみをこめて名前呼びたくなかった」ということであった。この問題は、一人の成人した大人として利用者と接するというを職員間で再認識して、改善されたが、この事例もエイジズムであろう。また、行事や日常のプログラムを作成する際も高齢者に対する価値観が出やすい。実践者は、高齢者の嗜好をステレオタイプ化して捉えていないだろうか。例えば、筆者のいた施設ではデイサービスの空き時間にTVを見るときなど、「水戸黄門」か「大岡越前」に合わせておく、体操の際のバック音楽はソーラン節か草津節などの民謡ものが多い、などが日常的に行われていたが、それらのことも高齢者は時代劇（勧善懲悪もの）が好き、民謡が好き、というステレオタイプな捉え方であろう。また、小学生対象の教材などを開発、販売してきた企業が、少子化とともに、高齢者のアクティビティ商品を作っている。輪投げ、風船バレー、的当てゲームなどであるが、そういった商品開発もまた「高齢者は子どもに戻る」という偏見に陥りやすいので、気をつけなければならないであろう。さらに、現場において、高齢者の能力を過小評価してしまいがちになる傾向も否めない。「どうせ出来ないから」「すぐ忘れてしまうから」という偏見が、実践の中でますます高齢者を依存的な存在へと追いやっている場合もあると思う。

医療現場におけるエイジズムについて論述した蓮沼（2003）によれば、たとえば、医療現場で、高齢の患者の名前がつかないときに「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼びかけたり、また幼児語で話しかけたりすることもある。場合によっては「言葉による暴力」となりうるが、実際に医療従事者にはエイジズムとは認識されていないことが多いという。<sup>(30)</sup> 前述のバルモアによれば、医療従事者のエイジズムとして、次を挙げている。「医療従事者は特に、高齢者の話し方に一定のパターンがあるということから年寄り扱いし高齢者に対して庇護者ぶる傾向がある。これらのパターンには、(a) 単純化、すなわち話し方が遅いとか単純な言葉遣いが多いなど、(b) 明瞭化、すなわち一語一語区切るような話し方や単純な文の構造など、(c) 卑下するような情緒的口調、(d) 浮ついた言い方、(e) 赤ちゃん言葉での話しかけ、などが含まれる。これらのパターンは高齢者が杖をついたり車椅子に乗るようになると、現れてくることが多い。」<sup>(31)</sup> たしかに「赤ちゃん言葉」まではいかなくとも、敬語を使わずに友達感覚の言葉で話しているなどの場面は、社会福祉の現場でも少なからず見かけることがある。

高齢者に対する保健・医療・福祉サービスの提供において、医療や福祉専門職の高齢者観は、サービスの質に多大な影響を及ぼす。小谷野（1993）によれば、肯定的な老人観はサービスの質の向上、否定的な老人観は質の低下をもたらす。しかし、専門職を含むサービス提供者の老人観は、一般の人々の老人観と大きく異なるものではなく、全般に否定的で、とくに重度の障害老人にサービスを提供する機会の多い者では、きわめて否定的であるという。<sup>(32)</sup>

そして専門職教育においてとくに注目されてきたのは、老人と接する機会（とくに配属実習）<sup>(33)</sup> が、否定的な老人観を強化するということである。確かに、前述3.の看護学生の調査結

果をみると、老年看護学の学習により、否定的偏見が強くなったことがあげられている。また、吉尾ら（1993）の看護学生を対象とした調査においても、実習終了後の高学年の方が高齢者に対する否定的イメージが強いという報告もある<sup>(34)</sup>。

これらから、重度の障害をもつ高齢者に関する学習をしたり、実際に接したりすることで、高齢者全体のイメージが、否定的なイメージへと強化されることがあるといえる。

また、その後看護師として実際に業務において障害をもつ高齢者と日常的に関わることで、さらにその否定的イメージが定着してしまうということもあり得るであろう。

筆者も実践経験で感じたことは、初回面接の際に、すでに重症の寝たきりであるとか、重度の認知症でコミュニケーションがとれないなどの高齢者の場合、その人の「元気だった頃」の姿がさわめてイメージしにくいということである。ましてや、高齢者との接触経験が少ない中で、専門職養成校を卒業したらすぐに現場で障害高齢者と接するような環境においては、偏見をもたずに相手を受容するということを頭では理解していたとしても、本当の意味で身につけることはなかなか難しい状況かもしれないのである。

### おわりに―社会福祉実践におけるエイジズム克服のために―

わが国においては、高齢社会の影響もありエイジングに関する関心は近年高まっていると思われる。現在、アンチエイジングが流行であり、いつまでも若く、美しく、健康でいたいというのが風潮である。また、エイジレスという言葉も使われだしているが、このエイジレスの典拠は、バード（Bird, C.）の、1983年の著書“The Good Years: Your Life in the 21st Century”（エイジレス人間の時代）である。その中でバードは、高齢化社会について口にされる言葉は、ともすると暗いものや悲観的なものが多いことにふれ、今後21世紀において年を取ることは、いままでの社会の中で年を取ることとは全くその意味が異なることを指摘した。また米国が大人社会（Adult Society）に移行していく過程で、大多数の人々は、年を取らない人（ageless）<sup>(35)</sup>が年を取ってしまう人より圧倒的に多い新しい社会で、その晩年を過ごせるようになるだろう、と述べている。

わが国においてはどうか。エイジレス社会という言葉も知られるようになり、実際に年をとっても元気に暮らして、その年齢を感じさせない活躍をしている人たちも登場してきている。日野原が提唱するところの、「新老人」<sup>(36)</sup>ということになるであろう。

まさに高齢社会は多様な高齢者の時代ということがいえる。しかし、高齢者福祉実践に携わる実践者は、未だこの多様性というものを援助に生かしているとは言い難い。前述したように、業務において障害高齢者と日常的に関わることで、否定的イメージが強化され、高齢者の多様性や、高齢者のもっている能力を過少評価してしまう傾向は否めない。

東條（1987）は、特別養護老人ホームの職員の処遇・介護に関する意識と態度に関して調査

を行ったが、その中で、前述のパルモアのFAQも使用した。それによれば、老人知識スコアが低い寮母の方が、高い寮母に比較してより高齢者処遇に関して否定的な情緒的反応（気疲れやイライラ）を感じるということが指摘された。老化や高齢者に対する正確な知識がないことで処遇対象である高齢者の特性を理解できずに気疲れやイライラを募らせていたといえる<sup>(37)</sup>。

実践現場におけるエイジズムをなくすためには、日常的に障害高齢者と多く接する専門職が否定的な偏見をもちやすい傾向があることを専門職自らがよく認識しておくこと、そして時代に即した高齢者に関する正確な知識をより多くもつことなどが、特に重要なことである。また、1の(3)で述べたように、青少年の時期から、祖父母などの身近な高齢者との良好な関係を持つことで、高齢者に対する肯定的イメージが醸成されるということもある。3.の社会福祉学専攻の学生対象の調査においても、高齢者との交流が多かったことが、偏見を減らす一つの効果となっていたとあった。

これらのことから、就業する前の段階における、養成教育における課題が見えてくる。社会福祉士や介護福祉士などの養成課程において、「老人福祉論」や「介護概論」、「老人の心理」などの講義や、介護実習、社会福祉援助技術現場実習などの実習プロセスで、高齢者に関する正しい認識を深めること、特に「健康な高齢者像」、「高齢者の多様性」といった高齢者のポジティブな側面における知識や体験を増やすことが出来るような内容をより多く盛り込む必要があると思われる。

契約によりサービスを自己選択する今日、高齢者の権利擁護をすることは、今後益々社会福祉専門職に求められている役割である。ノーマライゼーションの視点で高齢者の支援ができる人材が社会から要請されている。養成教育において、高齢者に対する偏見を排除し、多様な高齢者像をもちうる人材を育成していくことが、社会福祉実践におけるエイジズム克服のための第一歩ではないだろうか。

#### (注)

- (1) 野原泰嘉「儒教における老いの思想—孝との関係において—」『群馬松嶺福祉短期大学紀要 福祉と人間科学』第2号, 2001, 43頁
- (2) 野原泰嘉「前掲論文」44頁
- (3) 野原泰嘉「前掲論文」45頁
- (4) 長谷川倫子「高齢者の社会的地位—エイジズムから見る」岡村清子・長谷川倫子編『エイジングの社会学』日本評論社, 1997, 147頁
- (5) 副田義也「現代日本における老年観」副田義也編『老いの発見2 老いのパラダイム』岩波書店, 1986, 101頁
- (6) 副田義也「前掲論文」101頁
- (7) 奥山正司「建前としての敬老思想と本音としての老人蔑視の混在」『月刊 ばんぼう』7月号, 1999, 138頁
- (8) 佐藤泰道・長嶋紀一「大学生による老人のイメージ」『浴風会調査研究紀要』60号, 73～76頁
- (9) 深谷昌志『親孝行の終焉』黎明書房, 1995, 167～174頁

- (10) 中野いく子「小学生の老人観について」『社会福祉論叢 日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科』1995, 51～67頁
- (11) 島村逸子「大学生のお年よりイメージとそれを生み出す背景」『立正社会福祉研究』第4巻1号, 2002, 4～12頁
- (12) 島村逸子「前掲論文」9～12頁
- (13) 市川和彦「エイジズムと虐待を考える」『月刊総合ケア』vol. 14, no. 3, 22～23頁
- (14) 保坂久美子・袖井孝子「大学生の老人観」『老年社会科学』vol. 8, 1986, 114頁
- (15) 保坂久美子・袖井孝子「前掲論文」114頁
- (16) 市川和彦「前掲論文」25～26頁
- (17) 副田義也「主体的な老年像を求めて」『現代のエスプリ 老年 性愛・労働・学習』No. 126, 1978, 10頁
- (18) ロバート・バトラー著・内菌耕二 監訳『老後はなぜ悲劇なのか? アメリカの老人たちの生活』メチカルフレンド社, 1991, 15頁
- (19) ロバート・バトラー『前掲書』4頁
- (20) アードマン・B・パルモア著・鈴木研一訳『エイジズム—高齢者差別の実相と克服の展望』明石書店, 2002, 20頁
- (21) アードマン・B・パルモア『前掲書』43頁
- (22) アードマン・B・パルモア『前掲書』43～74頁
- (23) アードマン・B・パルモア『前掲書』43～74頁
- (24) アードマン・B・パルモア『前掲書』251頁
- (25) アードマン・B・パルモア『前掲書』322～323頁
- (26) 奥山正司「エイジズム—高齢者へのステレオタイプ」『現代のエスプリ 偏見とステレオタイプの心理学』1999, 7, 116～117頁
- (27) 南彩子「エイジズム: その意味と大学生への調査にみる高齢者差別意識」『天理大学人権問題研究室紀要』第7号: 1-14, 2004, 9～10頁
- (28) 小川妙子「看護学生の高齢者へのエイジズム—1年生と3年生のFAQの比較—」『順天堂医療短期大学紀要』12巻, 2001, 35～41頁
- (29) 小川妙子「前掲論文」40～41頁
- (30) 蓮沼剛「高齢者の一般診療（対応・治療）の“Do's & Don'ts”！」『治療—日常臨床で陥りやすい落とし穴—』vol. 85, 2003, 218頁
- (31) アードマン・B・パルモア『前掲書』64頁
- (32) 小谷野亘「老いに対する態度」柴田博・芳賀博他編著『老年学入門』川島書店, 1993, 182～183頁
- (33) 小谷野亘「前掲論文」182頁
- (34) 吉尾千世子・片桐美智子「看護学生の高齢者に対するイメージの変化」『順天堂医療短期大学紀要』4巻, 1993, 43～49頁
- (35) キャロライン・バード著・西岡 公他訳『エイジレス人間の時代 不老社会を築くパイオニアたち』ABC出版, 1985, 10～24頁
- (36) 日野原重明『「新老人」を生きる』光文社, 2001  
著書の中で、日野原は、75歳以上の高齢者を後期高齢者と呼ぶことを避け、むしろ輝かしい第三の人生へ船出する姿にふさわしく、「新老人」と呼ぶことを提唱している。その目指すところはサクセスフル・エイジングである。
- (37) 東條光雅『処遇・介護に関する特養職員の意識と態度』川島書店, 1987, 121～122頁